

提 題 要 旨

題目： 「ヒトの生き継ぎ―絶滅プログラム」と「科学の科学」をやろうじゃないかという呼びかけに自然主義的哲学はどう答えるか

氏名： 戸田山和久

所属： 名古屋大学

私の発表では以下のことを論じる。

(1) 地球惑星科学（熊澤、吉田）からの「呼びかけ」のうち、最もチャレンジングなものは、次の2つだと考える。

- ・「科学の科学」をつくろうプロジェクト。科学の発生を地球史の第七事件として捉え、それを科学する科学の科学をつくる。
- ・「ヒトの生き継ぎ―絶滅プログラム」を立てようプロジェクト。科学を携えた生命の生き継ぎのプログラムを立てる。

(2) この2つの呼びかけに、自然主義哲学は答える責務があると、私は考える。なぜなら、

- ・自然主義は、第一哲学の理念を批判し、科学と哲学の連続性を主張してきた。科学をこの世界に生じた現象として捉え、それを科学的方法と知見を援用して理解しようというのは、自然主義的な科学哲学がすでに主張していたことである（私も言っていたことだ）。
- ・「ヒトの生き継ぎ―絶滅プログラム」には、価値についての考察が不可欠だ。そして価値の話こそ、哲学が最後まで自然科学に譲り渡すことのない哲学の専売特許だと、我々は言ってきた（そのことにより哲学の存在意義を確保しようとしてきた）。自然科学者から価値の話は不得意だから哲学者に手伝って欲しいと言われて、私たちがそういうの得意じゃないです、とはとても言えない。

(3) この呼びかけに答えようとすることは、自然主義哲学にとって実り豊かな帰結をもたらすと思われる。

なぜなら、哲学の世界でバラバラに試みられてきた「〇〇の自然化」をすべてひっくり返すため、包括的な自然主義的世界像を提示する必要があるからで、それにチャレンジすることは、世界観としての自然主義に統合性と包括性をもたらすだろうから。

(4) しかし、どちらのプロジェクトもとんでもなく大風呂敷なので、本気でやろうとすると容易なことではない。そこで、

- ・それぞれのプロジェクトにおいて何が難しいかを明らかにする。
- ・2つのプロジェクトをどう関係づけたらよいのかを考える。

(5) どちらのプロジェクトも、現実的に「どこから手をつけるか」が重要。そこで

- ・これまでに萌芽的に試みられている「科学の科学」を将来的に統合していくためのプラットフォームが必要。その試案を提案する。

- ・「生き継ぎ」だけを中心概念として、「生き継ぎ」をいわば原＝価値として、価値論を再構成する必要がある。そのための試案を提案する。

その際、どちらにおいても「自然と情報処理システムの共進化」がキーワードになるのではないかと考えている。